

私は当院で2年間初期研修を行った後、そのまま消化器内科の後期研修医として研修を開始しました。後期研修として当院に残りそのまま研修する道を選んだのは、コンサルタントとして何でもバリバリと処置をこなす先輩の後期研修医の先生方の姿が、救急外来で働く初期研修医の立場から見て、非常に生き生きと、また充実した研修を送っておられるように見えたからでした。実際に私自身が後期研修を行う中で実感している、当院の消化器内科の大きな特長をいくつかご紹介します。

一つは、当科では従来より、後期研修医がメインとなって診療・処置に当たる風土が整っているという点です。当科の研修は例えて言うと、上級医という大船に乗って穏やかな海を航海するような「上級医について教えてもらう」研修スタイルではなく、自らが船頭となって荒波にもまれながらも何とか進んでいく研修スタイルに近いです。もちろん、上級医の先生方から日々いろいろと指導していただきながら、ということも前提ですが、自分で悪戦苦闘しながら得た知識・技術は、ただ教えてもらうだけの何倍もの早さで身につけていることが実感できます。特に処置については、一定の土台が出来た後には、上級医の先生に見守っていただきながら「まずはやってみる」と言っただけの環境は、これから消化器を学びたい人にとっては非常に恵まれた環境です。

二つ目は、当院の特長とも言えることですが、当院は救急に力を入れていると同時に、high volume center、高度医療を行う医療機関として、神戸市内はもとより、その周辺地域からの救急搬送・紹介受診が多く、症例を豊富に経験できるという点です。消化器内科でも吐下血や胆管炎など、緊急対応を要する症例が毎日のように搬送されてきて、仕事としては大変な部分もありますが、緊急内視鏡止血術などの修練もたくさん積むことができます。実際、私自身も当初の1年間で、上部内視鏡800件以上、下部内視鏡300件以上（いずれもそのうち約1割は緊急内視鏡）と、一般の病院での消化器内科研修3年間分にも匹敵するほどの内視鏡を経験することができています。また、処置や緊急だけでなく、一般の施設ではなかなか経験できないようなまれな疾患・重篤な病態も多く経験できます。

他にも、肝動脈塞栓療法などアンギオ治療も消化器内科が積極的に行っていたり、後期研修のうちからERCPやESDまで研修をできるなど、非常にactivityの高い環境の中で密度の濃い研修を行うことが出来ます。一人でも多くの仲間と一緒に切磋琢磨できることを楽しみにしています。